

第13回講義 (201607022)

- § 1 導入：「あなたは相対主義者ですか」と問う理由：
- § 2 相対主義とは何か？
- § 3 クーンのパラダイム論あるいは概念枠相対主義
- § 4 Davidsonによる概念枠相対主義への批判
- § 5 パラダイムの共約不可能性とDavidsonの概念枠批判の関係の考察
- § 6 New Relativism

§ 7 問題感受性

1 新相対主義とこれまでの考察の関係

2 問答の観点からの意味論

A アトミズムから全体論への変化

B 問答の観点からの呼応

- (1) 問いと発話：発話は問いへの答えとして意味を持つ（コリングウッド・テーゼ）
- (2) 問いと推論：推論は問いに答えるプロセスとして成立する

**#理論は、どのような問いへの答えなのか。**

理論とは、「どのように」の問いへの答えではないか。「物体はどのように運動するのか」という問いへの答えが、力学である。「この地域の生物はどのように生きているのか」への答えが生態学である。理論的な問いは、多くの場合、「aとbとcはどのように関係しているのか」というように関係を問う問いになるのかもしれない。

**#論理の体系、例えば命題論理の体系は、どのような問いへの答えなのか？**

伝統的には「私たちはどのように思考すべきか」という問いに對する答えだとされてきた。ラッセルならば、論理学は思考の法則ではなくて、「物事がどのようにふるまうか」という問いに對する答えであるというだろ。

**#問題設定による世界の構成**

「世界はどうなっているのか」という問いは、世界が認識から独立に存在することを前提している。つまりこの問題を設定することは、認識から独立に存在するものとして世界を構成することである。

「世界はどう構成されているのか」という問いは、世界が認識によって構成されていることを前提している。つまりこの問題を設定することは、認識によって構成されたものとして世界を構成することである。

「世界はどうなっているのか」→

- 「太陽は何でできているのか」→「太陽は地球の周りをまわっているのか」
- 「物体はなぜ落下するのか」→「力と質量と加速度はどう関係しているのか」
- 「木が燃えるとはどういうことか」→「熱とは何か」
- 「赤ん坊はどうして生まれるのか」「人はどうして老いるのか」「生命とは何か」

「世界はどう構成されているのか」

- 「なぜ人々は自然科学を信じているのか」
- 「なぜ女と男の違いがあるのか」
- 「なぜ人を殺してはいけないのか」「なぜ国境があるのか」
- 「なぜ机は机と呼ばれるのか」「なぜ言葉は通じるのか」
- 「なぜ人は小説を読むのか」「なぜ人は人生の意味を考えるのか」

このような問題設定によって、私たちは自然と社会を、認識 (or 社会的構成) から独立な存在／社会的言語的に構成されたもの、として認識 (or 構成) し、区別している。

### 3 問題感受性

#### #問題感受性

コリングウッド・テーゼ「(質問発話を除く) すべての発話は、問いに対する答えとして意味を持つ」を認めるならば、関連問題が変化すれば発話の意味は変化する。これを「問題感受性」と呼びたい。

#### #問題感受性と文脈感受性

(1) 同一の文の発話の意味は、関連質問が異なるとき、異なる (問題感受性)。

「一郎はバスケットボールの選手として背が高いほうですか」「一郎は背が高いほうです」

「一郎は大学生として背が高いほうですか」「一郎は背が高いほうです」

(2) 同一の疑問文の発話に、異なる答えが与えられる時、その原因として二種類のことが考えられる。

第一は、同一の疑問文が異なる意味で理解された場合である。この場合には、問いの意味が異なるので、答えが異なることが説明できる。

「一郎は背が高いほうですか」

「一郎は (バスケットボールの選手として) 背が高いほうですか」

「一郎は (小学生として) 背が高いほうですか」

第二は、同一の疑問文が同一の意味で理解されたにも関わらず、異なる答えが与えられる場合である。この場合には、答える者の判断の基準が異なるか、事実の認識が異なる場合と判断の基準が異なる場合がある。

「一郎は、小学生として背が高いほうですか」

A 「はい、一郎は背が高いほうです」

B 「いいえ、一郎は背が高いほうではありません」

Aはしばらく一郎にあっていないので、一郎の背の高さについて、Bとは違った認識を持っている。

AとBが、小学生の身長の平均について違った「基準」を持っている。

デイヴィドソンは、「ケッチとヨールの話」で、友人の発話「ヨールだ」を聞いた者 (それをケッチだと思っている者) が、概念理解の違いなのか、知覚の違いなのか、判定できないという議論をおこない、「部分的に翻訳不可能」な概念枠があると、明示的に語れないことを示した。これは、<意見が異なるときに、概念理解の違いなのか、知覚の違いなのかは、常に判定できない>という主張ではない。意見が異なるときに、<それは部分的に翻訳不可能な概念枠のためである>という主張に対して、そのような場合には、<概念理解の違いなのか知覚の違いなのかを区別できない>と主張するものである。なぜなら、概念枠の比較ができなれば、意見の違いが、<概念理解の違いなのか知覚の違いなのかを区別できない>からである。

もし上記の判断「基準」や概念枠を明示的に語りうるのならば、上記の判断は、より正確には次のようになる。

A 「はい、一郎は、基準aによれば、小学生として、背が高いほうです」

B 「いいえ、一郎は、基準bによれば、小学生として、背が高いほうではありません」

これはそれぞれ、次のような別の問いへの答えである。

「一郎は、基準aによれば、小学生として、背が高いほうですか」

「一郎は、基準bによれば、小学生として、背が高いほうですか」

ここでのAとBの違いは問答感受性 (ないし文脈主義) で説明できる。

## #問題感受性と評価感受性

発話が、理論的な問いに対する答えとして行われるとき、その発話は、真であるものとして主張されている。したがって、発話が行われる文脈と、評価が行われる状況は同一である。しかし、その発話が後で、(同じ人によってあるいは他の人によって) 評価されるとき、その状況は発話の文脈とは別のものになる。

この場合には、評価は、発話が答えた問いに対する返答ではなくて、別の問いに対する返答として生じる。同一の意味の発話が、異なる評価を受ける時、それは、評価の文脈が異なる。つまり、答えが最初に発話されるときとの問答と、後で評価されるときとの問答は別のものである。この評価の問いは、前の発話を照応する必要がある。これを説明しよう。

## # 照応の意味論 (未完成)

照応詞は、先行詞の内容 Content をその内容 Content とする。

・ 先行詞が指示対象を内容とするのなら、照応詞は先行詞の指示対象を内容とする。先行詞が指標詞や直示詞の場合、その指示対象は、意味性格と発話の文脈によって決定する。照応詞は、その意味性格と発話の文脈には言及せず、ただその指示対象を指示する。先行詞が固有名の場合、その指示対象は、発話の文脈に依存せず、一定の対象を指示する。照応詞は、その指示対象を指示する。

・ 先行詞が確定記述句の場合、その内容は**意義 Sinn** であり、照応詞は、先行詞の意義を内容とする。

「ソクラテスの妻は、悪妻で有名である。彼女の名前は、クサンチッペである。」

「彼女」は照応詞であり、「ソクラテスの妻」を先行詞とする。この第一の文は、ソクラテスが独身である可能世界では、偽ないし無意味である。この第二の文も、同様である。

## # 問答と照応

先週述べたように、

- ・ 問いと答えは照応を持つ
- ・ 問いと推論と答えも照応をもつ

「オバマの妻は誰ですか？」 「彼の妻は、ミシェルです」

「彼」の内容 content は、先行詞「オバマ」の内容 (この場合には、その指示対象) になる。照応表現の内容は、先行詞の内容と同じである。答えの発話の内容は、問いの文脈と答えの文脈に依存する。答えの発話は、つねに評価をとまなう。問いに対する答えは、つねに発話の文脈と同時に評価の状況をもつ。

(課題: 問いは、評価の状況と尺度も与えるのだろうか。もしそうでないとすると、評価の尺度を与える問いと、評価の尺度を与えない問いに分かれることになるだろう。評価の尺度を与える問いへの答えは、その内容の中にすでに評価の尺度を含んでいることになるのだろうか。)

## # 評価の問答と照応

・ 発話の内容は発話の文脈によって決定するが、その発話が、発話の文脈とは別の状況で評価されることもある。その時には、元の発話 p について、「それ (あるいは、その 'p') は、真であるか」と問う必要がある。この問いは、元の発話の propositional anaphora を含む。「それ」は、元の発話の内容 content を content とする。これによって、元の発話の文脈での内容が、評価の状況において保存される。

## # 相対主義と真理の対応説と整合説とデフレ主義の関係

相対主義が、両立不可能な二つの真なる命題を認めるとすると、それらの両方が事実に対応することは不可能であるから、真理の対応説とは矛盾する。ローカルな相対主義が両立不可能な二つの真なる命題を認めるとすると、

それは真理の整合説と矛盾する。グローバルな相対主義が両立不可能な二つの真なる命題を認めるとすると、それは整合説と両立するが、グローバルな相対主義は自己矛盾する。相対主義には、真理のデフレ主義が親和的である。

### #新相対主義の問題点、

- ・もし評価の基準を明示的に語ることができるならば、評価感受的な差異は、文脈感受的な差異に書き換えることができる。この場合には、文脈主義で説明できる。
- ・もし評価の基準を明示的に語るができないならば、意見の違いがあるとき、評価の違いなのか発話の理解内容の違いなのか、区別ができないだろう。この場合には、文脈主義と新相対主義を分けることができない。
- ・そうすると、新相対主義を積極的に語ることは難しいのではないだろうか。すくなくとも、理論的な問題に関する限り、私の考えは、ネガティブである。

### #残っている問題

問題：問題設定の相対主義はあるのだろうか。

問題の説明：二つの理論が答えている問題が異なるのならば、二つの理論は競合しない。問題の評価が対立するとは、単に<Aは、現象aの説明が現象bの説明よりも重要であると考え、Bは逆に考える>ということではない。もしそうならば、両方の問題を分担して取り組めばよいだろう。これは、<理論Aは現象aを説明できるが現象bを説明できず、理論Bは現象bを説明できるが現象aを説明できないとき、「なぜ現象aが生じるのか」に答えることが、「なぜ現象bが生じるのか」に答えることより重要であると考え、逆に考えるか>という問題である。ただし<理論Aが現象bの説明を不要であると考え、理論Bが現象aの説明を不要だと考えるのではなくて、とりあえずどちらを優先するかという違いである>とすると、ここには理論的に深刻な問題はないだろう。しかし、ドルベットがいうように（第二回講義末尾で紹介）、

(3) 同じ問いに答えたり、同じ問題を解いたりすることに関心がない、

とすると深刻な問題になりうる。しかし、このようなことは本当にあるのだろうか。問題の評価の対立は存在するのだろうか。言い換えると、問題設定に関する相対主義はあるのだろうか。

---

## 最終レポートについて 哲学基礎ゼミ

締切8月18日（木曜）

テーマ：ゼミの内容に関連して自由にテーマを設定してください。

形式：問題（一つの疑問文で表現すること）

問題の説明

答え

答えの論証

分量：日本語約6000字、or ca 2000 words in English

用紙：A4横書き：明朝P あるいは New Times Roman

提出場所：入江のメールボックス：文学部玄関

郵送の場合：560-8532 豊中市待兼山町1-5

大阪大学文学部哲学講座 入江幸男

Have a nice summer vacation!